アートセラピーの全国実態調査（２）
――内発的かつ自律的に展開する市井のアートセラピー活動――

○甲南大学人間科学研究所　石原みどり
（特活）ライフスキル研究所　小村　みち
神 戸 医 療 福 祉 大 学　兼子　　一

１　目的･方法

本報告では、第１報告（兼子）を前提に、各領域（福祉･教育･保健･能力開発など）において市井の活動家が内発的かつ自律的にアートセラピー（以下ＡＴと略記）の活動を展開している状況を、具体的な事例から解説する。それを通じ、市井のＡＴ活動の特性を提示し、その活動がどのように発生し展開しているのか、その細部で働く契機およびメカニズムを考察する。

第１報告の調査データの分析を前提に、事例調査のデータを用いて市井のＡＴ活動の様態を考察する。237 件のアンケート有効回答と 22 件の事例から抽出した特性を基準とし、それに適合する典型例の一つを取り上げる。該当事例として、福祉と教育･育児支援の領域にまたがって活動している「舞踊セラピー･晴留屋プロジェクト」（以下「晴留屋」と略記）について報告する。

２　結果

市井のＡＴ活動について５つの特性が指摘でき、これらの特性を「晴留屋」の活動内容から解説する。①ＡＴ的な機能は実践から内発的に発生；親子の絆を深める目的でダンスサークルを結成したが、活動中にカウンセリング/セラピー機能が認められる出来事が起こり、翌年からこの機能を拡大させ地域社会に発信し始めた。②自己定義としてのＡＴ；外部に対する活動内容の説明と理解促進が必要となり「ＡＴ」の活用が適切とされた。③肩書のための資格取得；助成金の獲得･新規会員獲得に必要な社会的認知と信用を得るため、団体代表のみ半年の通信講座でＡＴの認定資格を取得（その他、同等のコーチング,カウンセリング資格）。実践へのフィードバックは教本内容を多少参考にする程度で、現場は中心メンバー（現在５名）による協議と実践の積み重ねに基づいて進展している。④オリジナル要素を含んだ名称･メソッドの開発；自分達の活動内容をよりよく表し、既存のＡＴ技法や名称にも抵触しない「舞踊セラピー」を任意に考案。実践をもとに「晴留屋メソッド」（チャイルドコーチング法）を確立する。⑤ボランティアベースでの運営；経済的に困難な家庭の親子が参加できるよう月額会費 500 円を堅持。市からの助成金はイベント出演に充当。人件費は捻出できず、活動に必要な交通費および通信費が自己負担となっている。

以上に抽出された５つの特性は、事例ごとに具体的な中身や程度は異なるものの、いずれも半数以上の事例、アンケート回答について該当し、地域の日常生活に根ざした市井のＡＴ活動の特性として理解できる。そしてこれらの活動は、新たな分野でのＡＴ活用への道を拓き、ＡＴの領域拡大の推進力となりうる。

3 結論

アートが本来もっているセラピューティックな機能（カタルシス効果や自己表現による気づき、癒し効果等）は、環境や状況が整えば場所や時代を問わず発現するもので、精神医療･心理臨床の領域のＡＴのみがＡＴではない。一方で、基盤となる概念や技法の開発･普及において、心理療法としてのＡＴが大きく作用しているのも事実である。それゆえ、市井のＡＴ活動が内発的であっても、医療領域のＡＴを否応なく意識･参照することになろう。その際重要なのは、「治療」を目的としないＡＴ活動が日常の現場に即した自律的なあり方を維持するために、医療領域のＡＴとの距離をどのように保つかである。

また、活動の持続可能性について考えると、医療領域のような社会制度面のフレームワークを持たず、経営資源の確保により大きな困難を抱える市井でのＡＴは、ボランティアベースの活動にならざるを得ない点が課題となる。そのため、活動の安定性･持続性を重視し法人格を取得するなどしている事例もある。このテーマについては第３発表で報告される。

※　本報告は、JSPS 科研費･挑戦的萌芽研究 24653153「アートセラピーの全国実態調査」（2012-2014 年度、研究代表者：兼子　一）の研究成果の一部である。